



令和5年7月 日発行

富山県造形教育連盟会報「糸」について  
富山県造形教育連盟は、幼、小、中、高の先生方が参加する、県芸術文化協会に加盟の文化振興の任意団体です。造形活動で大切にしたい発達段階という縦のつながりを考えることができる研究組織です。各校種の研究団体の横糸と、県造連の縦糸により、造形教育という織物が美しくつくり出されることを願い、会報を「糸」発行しました。本連盟の会員限定ページにて公開します。

## 今だから

富山県造形教育連盟 会長 船木 英明

コロナ禍の3年間、教育現場もいろいろな形で振り回されました。アフターコロナの今年度、大きな残骸が至る所に残るスタートではないでしょうか。幼、小、中、高の新学習指導要領の完全実施、アクティブラーニングの視点での授業改善、コンテンツ(内容)ベースからコンピテンシー(資質・能力)ベース、残骸になっていないでしょうか。

今年2月頃、庄川水資料館で、岡部俊彦先生の「誇大妄想 EXP02023 岡部万博」という展覧会を見てきました。岡部先生は、一昨年、「ピンチをチャンスに」ということで、コロナ禍まっただ中の美術の授業について、本会のシンポジウムで提案いただいた、熱き熱き実践者です。展覧会場に入るや否や、岡部ワールドに引き込まれていくのです。大阪万国博覧会が原風景となった岡部先生が理想とする万国博覧会のイメージが、ドローイングや模型、実際の室内空間等をイメージしてのインスタレーション等で、大規模に空間が彩られています。何が何だか分からない面白さ、ただ底抜けに愉快なのです。ものをつくること、表現すること、そこにちっぽけな理由はいらなくとも心地よいスケール感、物静かで穏やかな岡部先生が、表現者としてのスイッチが入ることで豹変する驚きの世界観に魅了されてきました。

ものをつくることって楽しい、ものづくりと触れ合うと楽しいという原点に戻らなければいけないのではないのでしょうか。コロナ禍の残骸は、ものづくりは楽しい、ものづくりと触れ合うと楽しいという原点回帰によって、全てを洗い流すのではないのでしょうか。教師として、教科内容を教えることや評価基準という価値に縛られるうちに、造形を愛する一人の大人として、造形って楽しいよ、ものづくりって深いよ、つくってみようよ！ものづくりと触れ合おうよ！と子供たちに語りかけることを忘れていませんか。子供たちに「表現したい」と叫ばせてやって下さい。ものづくりのこんな空間にいて心地いいと感じさせてやって下さい。やっとならぬが明けた「今」だから・・・。

富山県造形教育連盟では、ものをつくることって楽しい、ものづくりと触れ合うと楽しいという原点を大切に、ものづくりを通じた子供の育ちを発達段階という縦糸、各校種の研究団体の横糸を情報交換を通して織り込みたいと思っています。子供たちの嬉々とした学びを支えるために・・・。

## 実践紹介(小)

富山市立杉原小学校

林 亜希子

富山県美術館の学芸員の方を講師に迎え、アートカードを関連させた対話型鑑賞を行いました。『なまをさがそう「え」と「ことば』』では、展示中の作品のカードを使い、絵に合う言葉を探す活動を行った後、本物の作品を鑑賞しました。カードで見ていた時に想像していた作品の大きさや質感等との違いから、新しい発見をしながら鑑賞をすることができました。『わたしの展覧会をつくろう』では、自分が展覧会を企画する人になり、アートカードから作品を選びました。展覧会の題名やみどころを考えるために、視点をもってカードを選ぶことは自分の作品の見方を広げるよい機会となりました。

## 富山県造形教育連盟の事業予定

- ・造形教材研究会 (8月3日：富山市立大沢野小学校)
- ・造形教育シンポジウム (12月3日：パレブラン高志会館)
- ・造形教育作品展 (11月18日～12月3日：富山県教育記念館)

会費(500円)を徴収したいと思います。

なお、富山県造形教育連盟の活動については、ホームページにて確認ください。<http://t-kenzouren.web.wox.cc/>

## おすすめの読書紹介

富山市立西部中学校 正橋 潤

『生成AI 社会を激変させるAIの想像力』白辺 陽 著

オリジナルとは何か。ヴァルター・ベンヤミンは、生の芸術に宿る権威を”アウラ”と呼んだ。最近、世間を騒がせているAIが生み出す生成物にそれは宿っているのだろうか。

本書は1960年代から始まるAI発展の歴史や現在利用できる生成AI(文章、画像、音楽、他)の様々なサービス、現状の生成AIが持つ問題点(情報の信頼性や生成物の著作権)について網羅的に紹介している。巻末では、人間がAIの万能性に心を委ね、思考することを止めてしまうディストピア的未来が示唆されている。この未来を日々の実践する造形教育によって回避できないかと思いを巡らせるものの、結論に至らず歯痒く感じた。いずれにせよ、現状のレファレンスとして用いるには最適の書であると思う。生成AIに興味があれば是非、本書を手にとってみてもらいたい。